

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 2 9 年 5 月 2 4 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770031

研究課題名（和文）20世紀前期イギリスにおけるデモクラシーとリベラリズムの連関：リンゼイの再検討

研究課題名（英文）The relationship between democracy and liberalism in Britain in the first half of the 20th century: Reexamination of the political thought of A.D.Lindsay

研究代表者

中村 逸春（NAKAMURA, ITSU HARU）

東北大学・法学研究科・助教

研究者番号：80633502

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、デモクラシーとリベラリズムの連関に着目するという研究手法をとることによってA・D・リンゼイの政治思想を統一的に把握することを目指し、結果として、「社会の理論」としてのデモクラシーと「統治の理論」としてのデモクラシーという二分法を用いつつ、リンゼイ自身がデモクラシー論についてリベラリズム論に資する議論として位置づける形で、両者の関係を整理していたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to reconstruct the political thought of A.D. Lindsay by focusing on the relationship between democracy and liberalism. Through this research, it has become clear that Lindsay himself linked between democracy and liberalism by regarding democracy as contributing to liberalism, using the dichotomy of democracy as a theory of society and democracy as a theory of government.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：デモクラシー リベラリズム ピューリタニズム 理想主義 社会主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、デモクラシーとリベラリズムの連関という点に着目することによって、20世紀前期イギリスにおいてオックスフォード大学を拠点に活躍した労働党所属の政治学者、A.D.リンゼイ(Alexander Dunlop Lindsay, 1879-1952)の政治思想を統一的に把握することを目指した。

本研究開始当初の学術的背景としては、第一に、リンゼイのデモクラシー論に関するこれまでの研究状況、第二に、リンゼイのリベラリズム論に関する研究状況を挙げることができる。

(1)リンゼイの政治思想に関する日本の研究は、ある点では英語圏における研究以上に、リンゼイのデモクラシー論を高く評価し、研究してきたと言える。近代デモクラシー思想に対するイギリス・ピューリタニズムの貢献について論じたリンゼイのデモクラシー論は、戦後民主主義との関係において注目されて以来、近年まで一定の関心が寄せられてきた。そして90年代末には、人文学者・社会科学者らによるリンゼイ論集として、永岡薫編『イギリス・デモクラシーの擁護者 A.D.リンゼイ その人と思想』(1998年)が刊行された。

(2)他方で、近年のイギリスやアメリカにおいては、世紀転換期イギリスの社会・政治思想を対象とする研究の進展に伴って、同時期に新たなリベラリズム論を提示したイギリス理想主義、ニューリベラリズム等についての研究書が多数公刊されている。そして、このような研究上の蓄積を踏まえて、積極的な自由の概念を提示しつつ、社会立法を通じた一定の国家介入の必要性を説いたイギリス理想主義者との関係に着目した、リンゼイのリベラリズム論に関する研究も現れてきている。

(3)しかしながら、これら双方の研究動向を関連づけようとする立場からの、リンゼイ政治思想に関する総合的な研究は、いまだ行われてはいない。

2. 研究の目的

そこで本研究においては、このようなリンゼイのデモクラシー論に関する研究状況と、リベラリズム論に関する研究状況とを踏まえて、リンゼイの政治思想におけるデモクラシーとリベラリズムの連関という点に着目し、リンゼイの政治思想を統一的に把握することが目指された。

3. 研究の方法

本研究目的を達成するための具体的作業

は、地道な作業ではあるが、リンゼイ政治思想におけるデモクラシーとリベラリズムの連関の糸口を見つけるために、リンゼイのリベラリズム論とデモクラシー論それぞれに関連するテキストを、同時代の様々なコンテキストに注意を払いつつ丁寧に検討し直すことであった。

また、イングランドのキール大学図書館の Special Collections and Archives の Lindsay Papers において、本研究と関連の深いリンゼイの未刊行資料を含む一次資料について調査・収集のうえ、本研究目的の達成のために活用した。

4. 研究成果

デモクラシーとリベラリズムの連関という点に着目することによってリンゼイの政治思想を統一的に把握することを目指した本研究の現時点における成果は、以下の通りである。

(1) 一年目の研究成果

まず一年目は、イギリス理想主義、ニューリベラリズム、社会主義(フェビアン協会など)に関する二次文献を精読しつつ、リベラリズムに関係するリンゼイの著作・論文等の分析を中心的に行った。

研究を通じて明らかとなったのは、リンゼイが自由放任主義に批判的であり、一定の国家介入の必要性を認めていたこと、そして、こうしたリンゼイの立場に関しては、イギリス理想主義者の内、特にT.H.グリーン、B.ボザンケ、E.ケアードからの影響が見られること、さらに、一定の国家介入の必要性をリンゼイは認めただけでなく、中間団体の社会的役割についてもその意義を高く評価していたこと、である。また、その際、リンゼイは単に個人と国家の関係という枠組みではなく、個人、中間団体ないし共同社会、国家という三者の關係に着目して議論を構築していたことも判明した。

この点に関連する各論的な研究成果としては、貴族院議員としての晩年の活動において、第二次世界大戦後に成立したアトリー労働党内閣による基幹産業の国有化政策に対してリンゼイが批判的であったことが明確となった。

リンゼイは、労働党について、労働運動との関係、つまり、労働組合や協同組合など中間団体とのつながりを重視し、中央集権的な産業統治の危険性を内包する国有化政策に対しては必ずしも肯定的ではなかったのである。リンゼイ自身労働党員であったが、フェビアン協会などの社会主義諸団体との関係よりも、中間団体を尊重する非国教主義の伝統に連なる労働運動との関係を重視していた。

また、こうした研究の成果については、〔雑誌論文〕 および〔学会発表〕 として発表した。

(2)二年目の研究成果

二年目は、大衆デモクラシー、議会制、政党制、全体主義、ナショナリズムなどに関する二次文献を精読し、20世紀前期イギリスのデモクラシー論に関連する近年の研究動向を確認しつつ、主にデモクラシー論に関するリンゼイの著作・論文等の分析を重点的に行った（ただし、すでに一年目に部分的ながら着手し始めた）。

明らかとなったのは、イギリス理想主義者の政治思想とリンゼイのデモクラシー論との一定の共通性である。イギリス理想主義者に広く認められる、ホッブズ、ロックの社会契約論に対する否定的評価と、ルソーの一般意志論への肯定的評価は、リンゼイにも見られ、彼のデモクラシー論の性格にも影響を与えていることが明確になった。

とりわけ、第二世代のイギリス理想主義者であるバーナード・ボザンケの一般意志論の、リンゼイのデモクラシー論への影響が明らかとなった。リンゼイはボザンケの一般意志論を基本的に高く評価しつつも、しかし、一部に修正を施す必要があるとしたうえで、リンゼイ自身のデモクラシー論において継承しようとしていたのである。この意味において、リンゼイの政治思想に対するイギリス理想主義者の影響は、その介入主義的なリベラリズムの性格においてだけでなく、デモクラシー論においても認められることが判明した。

こうした研究の成果に関しては、〔雑誌論文〕 において発表した。

また、二年目の夏に、未公開資料を含むリンゼイの一次資料を多数所蔵しているイングラントのキール大学図書館を資料調査・収集のため訪問し、日本では入手できないリンゼイの一次資料の内、本研究に関連するものを精査したうえで複写し、優先度の高い資料から分析した。

これにより、リンゼイが初期から政治に対して強い関心を示し、自らの政治的見解を所々で発信していたこと、また、特にデモクラシーに関して、社会主義とは「産業の民主化」を意味し、「政治の民主化」とは矛盾しないという、晩年にまとまった形で主張されるようになる見解をかなり早い時期においてすでに得ていたことが判明した。これは、リンゼイの思想的―貫性を裏づける重要な事実である。

(3)三年目の研究成果

三年目は、リンゼイのリベラリズム論を検

討した一年目とデモクラシー論を分析した二年目の双方の研究成果を踏まえ、リベラリズム論とデモクラシー論の相互関係に注目し、同時代のバーカーの諸著作と比較しつつ、リンゼイの政治思想に関するテクストを幅広く検討した。

この作業を通じて、1943年刊行の『近代民主主義国家』において、リンゼイ自身、リベラリズム論とデモクラシー論との関係を、「社会の理論」としてのデモクラシーと「統治の理論」としてのデモクラシーとの関係として議論していることが確認できた。デモクラシーという概念は、多くの場合、ある統治の形態を意味するものとして用いられるが（「統治の理論」としてのデモクラシー）、しかし、ある社会の形態についてのデモクラシーの用法（「社会の理論」としてのデモクラシー）もあるとリンゼイは考える。そしてリンゼイは、両者の関係について、多様な中間団体からなる「民主的」な社会の形態が何より尊重されるべきものであり、国家は「民主的」社会に奉仕すべきであること、また、奉仕するにあたり、国家は市民の政治参加を承認する「民主的」な統治の形態を備える必要があること、を主張した。その意味で、リンゼイにおいて、デモクラシー論は、リベラリズム論に資する議論として理解されていることが明らかとなった。

また、『近代民主主義国家』だけではなく、世界恐慌後の1930年代から40年代前半にかけての時期のリンゼイの他の著作・論文等においても、デモクラシーとリベラリズムの関係性についての議論とその変遷の跡が見られた。

本研究の最終的な成果に関しては、期間内に間に合わせることができなかったが、近く一冊の単著として東北大学出版会より刊行する予定である。

(4)今後の展望

本研究はリンゼイの政治思想について主に理論的に検討するものであったが、リンゼイが同時代の様々な社会的・政治的活動に関わっていたことを踏まえれば、当時のイギリスの社会的・政治的状況との関係にも目を配り、そうした観点から評価し直すことが不可欠である。

例えば、リンゼイのリベラリズム論に関しては、1930年代の失業問題に対するリンゼイの関わりについてさらに分析する必要がある。また、本研究で注目したリンゼイによる「社会の理論」としてのデモクラシー論と「統治の理論」としてのデモクラシー論の区別が意味するところについても、ドイツのナチズム、ロシアの共産主義についてリンゼイがどう評価していたかという点との関係が

重要であり、この点についてのさらなる検討が不可欠である。

そして、同時代の他の思想家たちとの比較を通じて、リンゼイの政治思想の同時代的意味について解明することも今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

中村逸春、「A・D・リンゼイのデモクラシー思想(三・完) コングリゲーションの伝統とその再生」『法學』査読無、第79巻第1号、2015、36-70

〔学会発表〕(計1件)

中村逸春、「A・D・リンゼイの英国社会主義論 近代民主主義の継承という観点に注目して」『政治思想学会第22回研究大会、2015.5.24、武蔵野大学有明キャンパス(東京都江東区有明)』

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/read0147370/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村逸春 (NAKAMURA ITSU HARU)
東北大学・大学院法学研究科・助教
研究者番号：80633502

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()